

森鷗外が舞姫を通して伝えたかったこと

テーマ設定の理由

私がこのテーマのした理由は明治時代に軍人、医師、小説家などの肩書きを持った知識人であった森鷗外がこの小説を通してなにを人々に伝えたかったのかという事に興味を持ったからです。

私はこの作品を読んで森鷗外が伝えたかったことの一つに「古い社会から新しい社会に変化するなかで人がどう変わるべきか」ということがあると思う。

この作品の作者森鷗外は江戸、明治、大正時代に生き主に明治から活躍した人物である。鷗外は医師の家系に生まれ若くして東京大学に入学し、ドイツ留学を経験したりこの時代の先端を行く知識人であり日本の西洋化を担う人物だった。また鷗外自身もドイツでの研究の影響で風呂嫌いになったり、自分の子供や孫に「茉莉」(まり)「真章」(まくす)と名付けたり西洋の影響を大いに受けた人物である。

この鷗外が生き「舞姫」の舞台となった明治時代は日本という国が近代化へ向けて西洋化を進め社会が大きく変化した時代である。この作品が発表された 1890 年も日本で初めて帝国議会が開かれるなど今までの古い日本社会から西洋的な新しい日本社会へ変化していた時代だった。

この作品では太田豊太郎の回想という形で書かれており、作中には「たちまちこの欧羅巴の新大都～」から続く表現にもあるように豊太郎が渡ったドイツの建物や雰囲気、人々についての描写がある。これによって読んでいる人、特に海外が珍しかった当時の人々に豊太郎が今までいた日本と異なる社会の中にいることが印象付けされると思う。またこのドイツ（プロシア）は当時の日本が西洋化の手本にした国である。鷗外は日本が将来このように西洋化すると予見したのではないか。さらに「維廉一世と仏得力三世との崩殂あり手、～」の様にこの社会もまた変わりゆくものだと暗示している。

主人公の豊太郎は父の遺言を守り、母の教えに従い、人が言うがままの人生を歩み、法を学び役人になった。そして受動的、機械的人間になり、ほかの事に自分から興味を持つ勇気が無く手を出せなかった。このように豊太郎は「個人」よりも「家」や「国」や「友人」などを優先し、己を縛る古い日本的な人間だった。しかしドイツの今までとは違う社会の中で「自由な風」にあたり己を縛っていたことに気づき自分の意思で歴史や文学を学び、見知らぬ異国人のエリスを助けた。こうして豊太郎は古い日本的人間から脱却できたようだった。

しかし相沢が豊太郎に対してエリスとの宴をきるかという問いに「友に対して否とは答

えぬが常なり。」とあるように自分の意思より他人の意見を優先してしまった。この結果別れなければいけなくなりエリスを裏切り発狂させることになった。

そして「ああ、独逸に來し初めに、～天方伯の手中にあり。」とあるように自分はドイツに来て自由な人間に変わったと思っていたが本質的には変わっていなかったことに気づいた。

これらのように鴎外は作品の中に「古い日本とは違う西洋社会」「変わっている社会の描写」「古い日本的人間から変われなかった豊太郎」などを、日本の西洋化を自分の見聞や知識を元に見込んだ上で盛り込み、当時や今の人々に「古い社会から新しい社会に変化するなかで人がどう変わるべきか」ということ言いたかったんだと思う。

反省、分からなかったこと

もっとエリスや相沢等の他の人物についてもっと深めればよかった。

なぜ豊太郎は変われなかったのか

参考文献

国語便覧

<http://sankouan.sub.jp/maihime.htm>